事業完了（廃止等）報告書

調査研究期間等

調査研究期間	令和元年６月２７日　～　令和２年３月１３日
調査研究事項	≪委託研究Ⅲ≫ ウ. 教育課程・指導上の工夫に関すること オ. 教職員の配置・研修に関すること
調査研究のねらい	本学級には現在45名の生徒が在籍している。戦争や差別、貧困・病弱・障害などで学齢期に教育を受ける機会を十分に保障されなかった人たちや結婚などで渡日した主にアジア諸国・南米から渡日した定住型の外国籍の人たちなどが学んでいる。 また、「義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保に関する法律」（以下、「教育機会確保法」）が施行後、既卒者に夜間中学への門戸が開かれ、本学級にも、若干名ではあるが、家庭事情やいじめ等で学齢期に不登校になりそのまま中学校を形式的卒業した人が、義務教育課程の学び直しのために入学している。 今後、本校でも他の夜間中学と同様、従来の層の生徒に代わって、これらの社会的な背景を持った人たちの入学希望が増加していくと思われる。 新渡日の外国籍の生徒の場合、その背景として持っている文化、母語、価値観は、非常に多様である。さらに、学習カリキュラムに関しては、まず、日本語を使い自分の身の回りの社会にアクセスできるようになるための生活言語の習得から学習が始まり、その後に各教科の学習に進むための基礎的な学習言語の習得へという順序立てた教育課程が必要になる。 また、「学び直し」を目的として夜間中学に在籍する生徒の場合、置かれてきた家庭環境・経済環境、十分に学校へ通うことができなかった原因・理由生徒によって異なっている。そのため、過去のネガティブな人生経験への十分な配慮をしながら、将来の生き方を見据えた進路選択、そのための学習目的の明確化、カリキュラムの工夫、個々の習熟度や学習方法など、個々の生徒の特性に応じた対応が必要である。 生徒の持っているこれらの多様な側面、それに基づく多様な学習ニーズに対応し効果的な教育課程を編成していくためには、職員全体が多様な実態の生徒が学ぶ夜間中学の教員としてのスキルアップを図り、学習シラバスとカリキュラムの改善に取り組んでいかなければならない。 また、生徒の学校生活に目を向けると、多様な背景・文化・価値観・多様な母語を持っている生徒たちであることから、お互いの意思疎通や共感・理解に課題が見られる。この問題の解決のためには、生徒どうしが積極的に関わりを持ち、互いのちがいとその背景を十分認識しつつ、ともに学ぶ仲間として結び

	ついていけるような仕組みを教育課程の中で工夫することも大切なことである。 　そのため、今年度は本委託事業において、まず次の３点を研究のねらいとしたい。 ①　教員の日本語指導能力の向上についての研究 　昨年度、成人外国人に対する日本語指導の専門家を招聘し、日本語教育について職員研修を重ね、職員一人一人の日本語指導に対する意識を高め、そのスキルアップに努めたが、さらに継続的な研修が必要であるため、昨年度の取組を基にして、今年度も日本語指導についての職員研修を行ない、そこから得た知識や技術を生徒のニーズに十分対応した自主教材編成と授業方法の改善に反映させる。 ②発達障害を抱えた既卒学習者へ合理的配慮の方法と内容についての研究 　現在、本学級には、幼少の頃の家庭でのネグレクト、発達障害などが原因で、不登校となり、その後社会に出たものの社会の受け入れ体制が整っていなかったために２次的障害も持つようになった生徒が在籍しており。本学級においては、これまで受け入れた経験のない背景を持つ生徒であり、日々手探りの対応を続けている。特に、学習シラバスとカリキュラムの作成、授業の進め方、学校生活の送り方についての配慮など、学校としての十分な「合理的配慮」を具体的に実施していく必要がある。そのため、今年度は大人の発達障害、特に重度の自閉症スペクトラムについて、臨床心理士などの専門家を招聘し、発達障害を持つ生徒についての理解と学校としての「合理的配慮」の方法について、職員研修を実施し、対応の改善と充実を図っていきたい。 　さらに、上記①②について、参考事例の情報収集をするために、新規に開設される公立夜間中学も含め、既卒者や外国籍生徒に対する日本語教育の実践において、先進的な取組を行っている学校への視察を行いたい。また、今年度、神戸市で開催予定の全国夜間中学校研究大会に職員を派遣して、各地の夜間中学の職員との情報交換・意見交換を行ない、本学級の具体的な取組に活かしていきたい。 ③　多文化共生に関わる取り組みの充実についての研究 　今年度は、教育課程で学校行事に位置づけている文化祭の開催を活用し、多様なちがいを持つ生徒に「互いに関わり、意見を交わし、一緒に作業を行い、一つのものを完成させる」プロセスを体験すること、生徒どうしの理解・共感・結びつきを深

	めていきたい。また、そのプロセスの中から生まれる夜間中学の多文化共生の姿を地域の人々にも発信し、地域の多文化共生を考えてもらうきっかけを作っていきたいと考えている。そのために、今年度、多文化共生という視点で、本学級の文化祭を見直し、実施していくための研究を行いたい。
調査研究の成果	事業計画書に記載したとおり毎月職員研修を実施し、発達障害理解と日本語学習にかかわる研修をおこなった。実際に発達障害をもつ生徒に対応するべく、研修での学びを踏まえて、日々職員どうしが意見を交換し、実践してきた。特に、実際に多くの発達障害の方々と向き合ってこられたカウンセラーの方や研究者の方を招聘しての慣習では実際に向き合っている具体的な課題を出しながら研修でき、日々の実践にすぐさま応用できた。また、日本語学習においては、今年度もYWCAより講師を招聘し、基礎的な指導から段階的に研修ができ、より具体的な日本語学習指導について研修を積むことができ、日本語の能力も多様な状況で入学してくる生徒に対して、より実践的な成果として活かすことができたと思う。 文化祭においては、より多くの人に夜間中学を知ってもらうための情宣活動や生徒の学習の成果を発表できる場としての取り組みにつながった。過去最高の来場者数があり、調査研究の実践が数字に表れたと考える。 全国夜間中学校研究大会においては職員全体が参加し、実践発表するなど、全国の夜間中学と交流することができた。 総括会議においては研修で得たことを各自の教材に活かしたことが報告された。 ただし、事業計画書では、「既卒者・日本語学習者受け入れ先進校視察（関東地区）」として計画していたが、予算を活用できる実施にはいたらなかった。年度当初に、複数名が関東の夜間中学を訪れ、既卒者や日本語学習者の受け入れについて実践校に学び、本校の取組に活かすべく研修を積んだ。しかし、文科省予算執行の期間にはあてはまらない状況だったため、あらためて、予算執行期間である６月以降に、関東地区への先進校視察を計画していた。ところが、その時期から、本校に在籍する発達障害を持つ生徒の対応に全職員がかかわらなければならない状況が続き、校外での視察研修を行うことは学校運営に支障を来すという状況となった。そのため、今年度の先進地研

	修は断念せざるを得ず、予算を活かした取組をすることができなかった。